

## はじめに

— 伝統工法を継承するリフォーム設計施工基準の作成にあたり —

伝統民家や集落の調査・研究は、建築学や民俗学、地理学、文化財建造物の保存技術、制度や職人集団等の研究等多くの優れた学術成果のみならず、建築工学からの伝統的建築の耐震構造上の検証や実験等も様々な取り組みが進展しています。現在では住まいに共通する基本的な要件として室内の快適環境やその温熱性能など省エネルギー化社会への動向とともに、伝統民家に対しても住居気候に関する検証や成果が公表されています。本書は伝統民家における性能面を中心に検証し、その指針とその仕様基準の設定を目指しました。

伝統工法で建てられた民家の相当数は築100年以上経過しているものが多い。経年変化による建物の劣化、腐朽、変形が顕在化し、同時に生活構造や時代の感性に伴う間取の変更や設備交換、採光部の拡張等様々です。そのような経緯もあり創建当初もっていた家屋の性能面での全体的均衡性が失われてきたともいえます。当初の民家はどのような状態であったのか。現住の伝統民家の状態、修理工事報告の記録、指標となるモデルの設定、現場計測等を踏まえ、伝統民家の温熱環境を考察・検証しています。

工業化以前の伝統民家は、自然素材がもつ個別特性、手仕事の技術上の相違性、さらに時代的、地域的な工法・様式の違い等、建物自体に内在する要素が異なっています。このような伝統民家の性状は「差異の集積体」の様相を呈しつつも、数百年の長期にわたり住み継がれてきました。この実証性は、現在の工業化住宅と原理的に異なる距離をもっていると考えられます。工学的な分析モデルとして、伝統工法の耐震性の実大実験等は、重要かつ有効な知見や手がかりを提示しますが、現実に伝統民家のもつ個々の「差異」による不確定要素が多く存在し、「評価・目安」の枠を超えるのは難しい。これらの民家は柱・梁から組み方等、一定の「原理」はあるものの、その太さや材質、材種、仕口や継ぎ手の加工、土壁の下地や厚さ等一律化されていません。「標準化」の全体性を志向する工業化住宅とは異なる位置づけからの解説、再検証が求められていると思われます。

本書は、このような民家の特質的価値を損なうことなく、住宅資本としての有効活用、継続性に寄与するため、その要のひとつである「室内の快適性」の確保に照準をあて、記述しています。

最後になりましたが、本事業が国土交通省による平成26年度リフォームの担い手支援事業の補助対象として採択されたことに対し、深く感謝の意を申し上げます。

一般社団法人 千葉県古民家再生協会  
理事長 高野祐之